

学生の「能登・祭りの環」インターンシップ事業における 地域・大学協働に関する研究

A Study of Community and University Collaboration
in the “Noto Maturi no Wa” Internship Program.

池田 幸 應（人間科学部スポーツ学科教授）

Yukio IKEDA (Faculty of Human Sciences, Department of Sports Science, Professor)

〈要旨〉

学生の課題解決能力促進のためには、地域での協働の環境設定が重要であり、相互交流を基本としたコミュニケーション、相互理解から各学生の様々な可能性を引き出し、その力を地域での取り組みに結び付けることが、学生たちにとっての無理のない継続的活動へと繋がるものと考えられる。地域、特に奥能登地域での過疎高齢化は顕著であり、地域コミュニティの存続可否が深刻な課題となっている。穴水町においても地域課題方策として「観光資源や祭りなどの地域資源を活かしたまちづくり」が示され、コミュニティ存続自体を含め地方創生の視点からも、地域の祭りなど伝統的行事等の継承のため、次世代人材の確保・育成が重要である。本稿では、地域・大学協働による取り組みとして実施されている学生の「能登・祭りの環」インターンシップ事業に着目し、人材育成の視点から過疎高齢化地域における地域・大学協働の在り方について検討した。

〈キーワード〉

地域・大学協働 学生参画 体験活動 祭りインターンシップ

1 はじめに

全国的に人口減少が進み、特に地方での過疎高齢化が加速している。石川県、特に奥能登地域においてもその傾向は顕著であり、地域コミュニティの存続可否が深刻な課題となっている。これらの背景もあり、人口減少の克服を我が国が直面する最も重要な課題と位置づけ、2014年11月に「まち・ひと・しごと創生法」が制定され、同法に基づき同年12月に今後50年間の我が国の将来展望として「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」が3つの視点から示され、同時に2015年度より2019年度の5年間の施策の方向性として、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が策定され、4つの基本目標により実施・推進されている。

本稿での研究対象事例地域の穴水町においても、2015年10月に「穴水町人口ビジョン」及び「穴水町まち・ひと・しごと創生総合戦略」が策定された。これに際して、同町が実施した住民アンケート調査「穴水町総合戦略の策定に向けた住民意見アンケート調査」（2013年7月、対象：同町に居住する全世帯主及び20～49歳同居家族、方法：調査票配布・郵送回集、回収率：46.2%）結果においても、人口減少対策の具体的な取り組みとして地域の活性化、にぎわ

い創出を目指す取り組みについての地域住民の視点から「観光資源や祭りなどの地域資源を活かしたまちづくり」が61.1%と最も多い結果であった⁽¹⁾。

奥能登地域には、約200の「祭り」があり、地域資源として豊富な自然、歴史、文化、そこに暮らす人々の存在が挙げられ、地域コミュニティの存続を含め地方創生の視点からも、その地域の祭りなど伝統的行事等の継承及びそのための次世代人材の確保とその育成が重要である⁽²⁾。本稿では、石川県で地域・大学協働による取り組みとして実施されている能登キャンパス構想推進協議会「能登・祭りの環」インターンシップ事業での学生の祭りへの参画、特に長期インターンシップを事例に過疎高齢化地域における地域・大学協働の在り方について検討を試みた。

2 研究方法

奥能登2市2町で実施されている能登キャンパス構想推進協議会「能登・祭りの環」インターンシップ事業での地域・大学協働の現状について調査し、課題提案を行った。調査対象は、「能登・祭りの環」インターンシップ事業での長期インターンシップ学生10名（2016年度4名、2017年

度5名)であり、インターンシップ学生の所属大学、協議会加盟大学、地域行政機関担当者、地域関連団体代表者についても追加対象に加えた。調査方法として質問票を用いたインタビュー調査〔内容：祭りインターンシップの状況について、インターンシップ実施への事前対応・期間内対応・事後対応について、インターンシップに対する成果・課題について、インターンシップへの期待(今後の展望)について〕を実施し、加えて祭りでのインターンシップ現場への同行調査を行った。

3 石川県における地域・大学協働について

3-1 公益社団法人大学コンソーシアム石川

石川県は、金沢市を中心に20高等教育機関が集積し、約3万人を超える学生が集う「学都」県であり、2006年度、大学コンソーシアム石川(現 公益社団法人大学コンソーシアム石川)の設立による大学相互・大学-地域間連携の推進に加え、そのコンソーシアム体制をベースに2012年度より5年間の文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」(地域連携)、2015年度からの「COC+事業」等により、県内での産学官金労言の連携推進が継続的に図られてきている。特に県内の自治体19市町及び20高等教育機関、そして産業界から構成されている大学コンソーシアム石川での地域連携専門部会担当事業である「地域課題研究ゼミナール支援事業」及び「貢献型学生プロジェクト支援事業」は、学生の主体的地域参画及び地域課題解決提案の試みとして2006年度より継続的に実施されおり、地域貢献、学生の教育・研究地域貢献推進の視点からも高く評価を得ている⁽³⁾。また、これらの流れが各大学での学生の地域現場への実践的学びへの推進や地域連携部局の設置・充実化に拍車を掛けたとも推測できる。

3-2 能登キャンパス構想推進協議会

前述したとおり、大学等のない奥能登地域での人口減少、過疎高齢化等の諸課題への地域・大学協働による積極的対応と大学の教育・研究・地域貢献の推進のために、2011年3月より石川県、奥能登2市2町(珠洲市、輪島市、能登町、穴水町)および継続的に奥能登地域での学生参画が行われていた県内4大学(金沢大学、石川県立大学、石川県立看護大学、金沢星稜大学)が加盟し、「能登キャンパス構想推進協議会」が設立・組織され、2016、2017年度において、以下の4事業が実施されている。

① 国際発信強化推進事業

能登をテーマとした海外の大学・研究機関との共同研究やワークショップの開催、留学生と日本人学生・地域との交流事業を通じ、能登の魅力の国際的発信に繋げるものである。

② 課題解決実証事業

2市2町共通のテーマを設定し、行政・大学に加え地元企業や地域団体と協働で地域経済の活性化に繋がる具体的事業であり、企業、諸団体、大学等で学生受け入れプログラムを開発し、地域志向型インターンシップを実施するものである。

③ 「能登・祭りの環」インターンシップ事業

学生らが実際に祭りの担ぎ手等、地域住民と協働で参画することにより、能登の祭りををはじめ地域の自然、歴史、文化を学ぶとともに、日本遺産の継承にへの貢献に資するもので、祭りにおける情報発信や運営など、準備段階から地域へのインターンシップとして関わることで、学生が継続的に地域と関わるしくみづくりに繋げるものである。

④ 域学連携による地方創生セミナー開催事業

複数大学の研究者や学生も参加し、「地域+行政+大学」連携の全国の優良事例についての把握や地域間連携促進に向けた行政職員向けセミナーを開催し、域学連携を推進するものである。

これらの中で、特に「能登・祭りの環」インターンシップ事業は、平成2011年度当初、「能登の祭り支援プロジェクト」として、金沢大学地域連携推進センターが輪島市での「名舟大祭」、「黒島天領祭」、「樺原北代比古神社秋祭り」及び穴水町での「岩車奈古司神社秋祭り」の4つの祭りに学生ボランティアを派遣しており、この流れを受けて翌年度より、以前からも継続的に奥能登地域での各種祭りに積極的な学生参画を推進してきた金沢星稜大学が能登・祭りの環プロジェクト」の事業主幹大学として積極的に参画することとなった。事業対象となる祭りの選定については、奥能登2市2町で行なわれる祭りを対象に各市町ごとに1つを推薦・選定し、それらの4つの祭りと4市町をキーワードに複数大学に跨る学生たちの「祭りの環」により、学生たちの視点から奥能登地域の魅力を発信し、可能な範囲で地域課題への解決策に取り組むことになった。なお、2016年度より「能登・祭りの環」インターンシップ事業として、参加対象を能登キャンパス構想推進協議会加盟大学所属学生に限らずに奥能登2市2町で展開されている(表1)。

これまで、奥能登地域での祭りへの学生参画は、地域の知縁による学生個人、個別の大学関係者等への限定部局的活動支援依頼によるものが多かったが、地域の過疎高齢状況により、各自治体担当者も積極的な関与が望まれており、各大学での地域連携センター等の設置に伴い、それらを窓口とした大学全体としての取組みへと移行し始めている。能登キャンパス構想推進協議会事業においても、初年度は「能登の祭り支援プロジェクト」として、金沢大学による限定的祭りへの限定的学生ボランティア派遣に留まっていたが、その後の「能登・祭りの環」インターンシップ

事業により、加盟4大学を中心に祭りに「事前-当日-事後」に亘る長期的参画を通して、学生たちの視点から奥能登地域の魅力を発信し、協働した地域課題解決への推進に繋げようとしている。

表1 「能登・祭りの環」インターンシップ事業への参加状況
[*2017年度の参加については、()]

市町・祭り (開催日程順)	参加学生	参加教員
穴水町 「沖波大漁祭り」	3大学・52名 (6大学・45名)	1大学・1名 (1大学・3名)
能登町 「矢波諏訪祭」	2大学20名 (4大学20名)	2大学・3名 (2大学2名)
輪島市 「黒島天領祭」	2大学・41名 (4大学45名)	2大学・3名 (2大学・3名)
珠洲市 「粟津の秋祭り」	4大学・27名 (4大学・20名)	1大学・2名 (2大学・2名)
合計	5大学・140名 (6大学・130名)	2大学・4名 (4大学・8名)

4 「能登・祭りの環」インターンシップ事業による祭りへの継続的参加

4-1 能登の祭りについて

我が国には、古くからそれぞれの地域において様々な祭りが存在しており、地域コミュニティの存続に不可欠な存在である。能登地域においても、その特徴である「キリコ祭り」が2015年4月21日に文化庁の日本遺産に認定〔「灯(あか)り舞う半島 能登～熱狂のキリコ祭り～」(七尾市、輪島市、珠洲市、志賀町、穴水町、能登町)〕され、地域住民のアイデンティティの再確認や地域のブランド化等にも貢献し、地方創生に繋がるものと期待されている。しかし過疎高齢化に伴い若年層人口も低下し、祭りの担い手不足により、その運営継続に困難が生じている切実な現状であり、既に消滅した祭りも少なくない。また、現行の祭りの多くが、その運営方法を簡略化、或いは祭り自体の形を変えざるを得ない状況の中で、地域外からの担ぎ手等の助っ人を確保し漸く実施が可能となっているケースも少なくない。柳田⁽⁴⁾が示すように、本来、祭りを「マツラフ」(御側に居ること(仕える、奉仕する、思召しのままに勤仕するという態度)と捉えるべきではあるが、社会環境の変化や地域の実情により、祭りの継続のためには、その実施形態が変化しざるを得ないのも事実である。このような状況下で、人口当たり高等教育機関数および学生数が多い学都石川において、学生の祭りへの参画、大学等の協働参画が期待されてきた。加えて、学生の祭りへの参画は、即ち地域コミュニティへの流入参画であり、学生や若手研究者にとっても地域の歴史、自然、文化、そしてその地域特性やそこに暮らす人々との直接的学び研究の場でもある。

4-2 「能登・祭りの環」インターンシップ事業による祭りへの継続的参加

奥能登地域の4市町で行なわれる祭りについて、各市町ごとに1つの祭りが選定され、学生・教員の所属大学の壁を取り除き、祭りの主催地域、その関連自治体行政部局との連携・協働促進をめざした「祭りの環」により、学生たちの視点で奥能登地域の魅力を発信し、可能な範囲で地域課題への解決策に取り組まれている。

各市町での事業対象祭りの選定については、各行政担当部局と市町内の各地域での祭り担当者との事業説明、公募、協議の上で決定されている。特に2017年度においては、これまでの主幹大学による事業推進から「能登・祭りの環」インターンシップ事業実行委員会が組織され、一大学に事業運営負担が生じないように改善されている。この実行委員会の組織は、本協議会加盟大学、4市町より選出された各1名に加え、石川県企画振興部企画課高等教育推進担当者により構成されており、筆者が委員長として選出されている。なお、2017年度においても各市町内とも2016年度と同一地域の祭りが選定されている。選出された祭りについては、以下のとおりである。

(1)「沖波大漁祭り」(穴水町沖波地区)

海の安全と大漁を祈って行われている祭りであり、地域での担ぎ手不足により、2011年からはお盆時期の8/14・15日に行われるように変更された。祭りは2日間あり、初日、法被姿の担ぎ手等の御祓いから始まり、地区内をキリコ5基(「新生組」、「北組」、「中組」、「捨人組」、「立戸組」)が練り歩き、20:00の花火の合図とともに5基総てが諏訪神社へ向い神輿を迎えて沖波の町を巡回し、恵比寿崎の恵比寿堂に移動する。恵比寿堂では深夜までキリコ乱舞が行われる。翌日の午前中10:00にキリコが立戸海水浴場に揃い、太鼓演奏が始まる。その後、合図の笛でキリコが1基ずつ順番に海に入り、担いで移動したり、水をかけあったり、キリコの上で太鼓を鳴らしたりする。キリコが海に入り始めて約1時間弱後、笛の合図でキリコが1基ずつ順番に砂浜に戻り始め、総てのキリコが砂浜に勢揃いする。能登のキリコ祭りの多くが夜の見所の中、沖波大漁祭りは昼夜共に見所のある祭りである。

参加状況について、担当教員のコメントを以下に示す(抜粋)。

○「…(中略)…本年度においては、「能登・祭りの環プロジェクト」として、学生たちがより積極的に各地区(5組)に分かれてキリコを担いだ。祭りでは、1日目のお昼過ぎから深夜まで男子学生だけではなく、女子学生も積極的にキリコを担ぎ、2日目の午前中には、立戸ノ浜の海中へとキリコを担ぎ入れ乱舞した。今年度は、これ

まで参加していた同町での合宿中の大相撲追手風部屋と春日部屋の力士が参加していなかったが、学生たちの担ぎが祭りの盛り上げに繋がった。また、祭り終了後、地区住民から交流会（「よばれ」）に誘われ、積極的に交流することができた。その場では、学生たちは地域住民との直接的会話を通して、住民の地域への思いや地域課題について感じ取ることができた。2日間、真夏の猛暑の下、汗をかきながら、祭りを通して地域の人々との協働により、地域の歴史や伝統文化について実学する機会を得た。…（中略）…”

（2）「矢波諏訪祭」（能登町矢波地区）、「黒島天領祭」（輪島市門前町黒島地区）、「栗津の秋祭り」（珠州市三崎栗津地区）

「沖波大漁祭り」と同様に、「矢波諏訪祭」、「黒島天領祭」、「栗津の秋祭り」についても、参加学生の多くがキリコ祭りへの参加を通して、キリコ祭りの雄大さは勿論、地域の方々の優しさを実感することができた。特に祭り前後の「よばれ」では、地域特有の郷土料理など、地域の方々からの温かいもてなしを受け、多くの参加学生が継続参加への気持ちを強くした。しかし、祭りによっては、地域の人口減少によって、本来担いでいたキリコが車輪を付けざるを得ない現状など、地域の諸課題に直接触れ、地域住民からの声によって、祭りへの学生参加の期待の大きさについて理解することができた。祭り成立のためには、キリコの担ぎ手の確保が不可欠であり、この点からも学生への期待は大きいことは事実であるが、地域内での若者減少の実状からも、「よばれ」等での世代間、特に高齢者と学生たちとの交流は、何よりも地域住民にとっての大きな地域肯定観の向上に繋がったものと推測される。

4-3 「能登・祭りの環」インターンシップ事業における長期インターンシップ

「能登の祭り支援プロジェクト」としてスタートし、2015年度まで「能登・祭りの環プロジェクト」として実施されてきたが、2016年度より「能登・祭りの環」インターンシップ事業として、祭り当日への学生参加に留まらず、事前の地域での祭りの打合せや準備段階から事後まで祭りへ参画するに至っている。

2016年度の祭りへの学生のインターンシップ参画設定化により、学生の祭りへの参画形態を「当日インターンシップ」、「短期インターンシップ」、「長期インターンシップ」の3つにタイプに設定した。しかし、短期インターンシップについては、地域側と調整状況及び長期インターンシップとの相違の具体的明確化ができず、募集には至らなかった。また、長期についても、活動日程の点からも、各大学

での定期試験等と同時期ということもあり、2016年度においては、最終的に4名（同一大学所属学生）に留まった。2017年度においては、「能登・祭りの環」インターンシップ実行委員会を設置し、協議会加盟4大学を各祭りの担当大学として位置付けたことにより、昨年度の実施内容の学生への情報周知の向上及び各担当大学内での所属学生への直接的情報発信もあり、定員の5名が確定し、その所属も4大学に亘っている。

<長期インターンシップの活動の流れ>

長期インターンシップの流れは以下のとおりである。

【募集（能登キャンパス構想推進協議会事務局である石川県企画振興部企画課高等教育担当より）⇒応募学生に対し説明・面談会を実施⇒決定⇒インターンシップ学生の決定、顔合わせ⇒祭り・地域に関する基礎的勉強会⇒現地視察⇒現地住民との事前打ち合わせ⇒祭りの準備（キリコ出し）⇒祭りの準備（キリコ組み立て）⇒祭り本番（キリコ担ぎ）⇒祭りについての評価⇒次年度に向けての提案報告（他の祭りも含め、継続的に支える仕組みづくり）】

2017年度の長期インターンシップでの様子を以下に示す。

なお、このインターンシップ学生の募集については、能登キャンパス構想推進協議会加盟4大学に制限せず、大学コンソーシアム石川の事業等を活用し、県内の20高等教育機関所属の全ての学生に募集情報を配信されている。



写真1（左）長期インターンシップ志望学生への説明会
写真2（右）長期インターンシップ学生へのガイダンス



写真3（左）学生の穴水町への事前視察
写真4（右）現地での祭り責任者会議での学生



写真5（左）保管倉庫からのキリコ出しを行う地元青年団と学生
写真6（右）キリコを組み立てる地元住民と学生

5 事業による効果

2016年度よりスタートした長期インターンシップ事業は、単に当該地域の祭りに学生たちをキリコの担ぎ手として参加を促進することではなく、学生たちが地域に入り、地域コミュニティでの大切な一大事業に地域住民とともに協働参画することにより、参加した地域住民、学生は勿論、自治・大学関係者においても、地域の抱える課題への理解とその対応策に係る積極的姿勢の醸成に繋げるものである。

したがって、各地域、各祭りの独自性は存在しているが、どの地域、どの祭りにも共通した課題があり、それらを体験的に協働的に学ぶことで、学生たちや地域の次世代人材の育成に繋がって行くものと考えられる。

本事業に際して、参加したインターンシップ学生、祭りの主催者側としての地元青年団長、区長、及び地元自治体関連部局担当者からの声を以下に示す⁽⁵⁾。

まず、本事業に参加したインターンシップ学生の声は以下のとおりである。

- “これまでの事業の趣旨を継続することができた。”
- “私たち学生が地域へ入り、事業に参加すること自体が奥能登地域への交流人口の促進となり、地域の活性化に繋がっている。”
- “地域の伝統文化・行事が過疎高齢化のため運営困難な状況において、学生たちの参加により、活気が取り戻され、祭りの継承へと繋がっている。”
- “私たち学生が地域の様々な活動に関わることで、新たな地域の課題も明確化・意識化され、地域での連携促進に繋がっている。”
- “祭りを通して、地域住民や行政など、多様な人々と多く接することで、私たちにこれから必要とされる社会人基礎力を無意識に促進することができた。”
- “異なる大学の学生たちが地域での活動を継続的に続け、活動を学内外に発信することで、大学自体の地域貢献や大学間連携への取組み体制推進に繋がっている。”

このように、学生たちにとっては、祭りは自分の日常生活と離れた新しい体験であり、地域の抱える共通キーワード「過疎高齢化」を実感として捉えることができ、加えてそのことが他人事ではなく、自分も含めて地域、社会全体の課題であることに気づき、考え、認識する重要な機会となっている。

一方、地域の若手住民で、祭りの責任者（沖波青年団長 彦 雅大 氏）からは、以下のように、学生の参画による地元後継者側の祭りへの参画意識の促進が示されている。

- “地元の青年団は10人足らずのみで、担ぎ手の数も減少、高齢化している。既に地域の人だけでは祭りを存続することはできず、学生の皆さんの参加によってはじめて活気が戻ってきており、その姿を見ることで地域外へ出て

行った地域出身者からも望郷の想いが強くなったとよく耳にするようになった。単に学生の皆さんに頼るのではなく、自分たちも一緒に祭りを継続してゆきたい。”

また、当該地域区長（道本巖夫 氏）からも、地域の積極的な受け入れ態勢の意向が示されている。

- “学生さんの参加は、地域にとって活気が出て大歓迎です。学生さんには、キリコ祭りのような昔ながらの慣わしが能登には受け継がれてきたことを感じてほしい。そして、祭りの体験によって視野を広げ、将来何か役に立ってくれば、うれしい限りです。”

同様に当該地域の自治体関連部局関係者（穴水町企画調整課長 二谷康弘 氏）からも、学生の祭りへの参画に対し歓迎の意を示しながらも、地域と学生側の双方のマッチングの重要性を指摘している。

- “キリコ祭りは地域にとって生活の一部であり、特別のものではない。しかし地域から人が流出し、昔からの神事を次代へ渡すための手段を考えなくてはなりません。沖波の場合、学生の求める体験と地域にニーズとのマッチングが良好に進んだケースと言える。”

このように参加学生、受け入れ側にとって、双方の目的及びニーズのマッチングが図られており、この背景としては、これまでの継続的な地域・大学との交流とそれをきっかけとした穴水町と金沢星稜大学との連携協定に基づく継続的な連携協働事業等により、地域の「受け入れ側」意識の定着に寄与しており、加えて祭り終了後の各地区での「よばれ」における住民と参加学生たちとの親密な交流により、双方の関係が一層深まっているものと考えられる。



写真7 「よばれ」での地域住民と学生との交流（「立戸組」）

特に本年度の長期インターンシップにおいては、複数大学の異なる専門性を有する学生が協働で取り組むことにより、複合的な視点に加え、祭りの背景や裏舞台の諸事情についても理解を深め、今後の祭りへの学生の積極的参画に対する具体的提案が期待される。インターンシップ学生は、祭り・地域に関する事前の情報把握後、実際に現地視察を行い、住民と協働で事前打ち合わせ、キリコ出し、キリコ組み立て、そして祭り本番でのキリコ担ぎに参画した上で祭りについての評価、次年度に向けての提案を行って

いる。その一例として、各祭りに関する「参加マニュアル」やそれぞれの祭りに共通した参加者用の「キリコ祭り六箇条」(写真8)が挙げられる。特にこの六箇条は、実際に参加した学生の視点から、最低限度の参加マナーについて明示されており、他の多くの祭りへの参考となるものである。



写真8 長期インターンシップ学生作成による「キリコ祭り六箇条」

6 課題と今後に向けて

インターンシップ推進に向けて、参加学生より以下の具体的課題及び提案が示されている。

- ・ 学生もクラブ活動やアルバイトなどで忙しく、特に3、4年生は、就職活動等とも重なり、スケジュール調整が難しいケースが多い。特に複数大学の学生間の事前のスケジュール調整、連絡、打合わせ等が難しい。⇒スケジュール管理や平常から相互交流・連携関係を築くことが重要である。
- ・ 奥能登地域での活動のため、現地への交通手段としてのバス費用が大きく、今回の助成金のほとんどがバス代の支出となった。⇒活動継続に際し、交通費、宿泊代などの経済的負担に対して、大学や地域からの支援、公的助成や補助金事業等の確保が必要である。
- ・ 学生が単独で取り組むよりも、様々な課題を抱える地域に対し、様々な専門性や考えを持つ複数の大学やゼミナール等の学生たちが連携して取り組むことが、相互学習や地域の課題解決にとって効果的である。⇒学科・学部・大学の枠を超えた学生間の交流・連携・協働のために、更なるの徳庵パス構想推進協議会等の連携組織の充実とその支援が必要である。
- ・ 今回の事業実施に際し、各祭り終了後における地域（地域の魅力、課題等）についての検討会の開催や各地域への事業報告が十分に行うことができず、また、学生たちの視点から奥能登地域の魅力の発信や地域課題への解決

策に実践的には取り組むところには至らなかったため、事業の発展・継続が望まれる。⇒事業は、次年度以降も継続予定であり、地域側も巻き込んだ祭りに対する評価・継続検討組織やそのための大学・担当行政組織のより一層の協働参画が必要である。また、専門性の異なる複数大学、学部等に跨る学生の事業への参画が望まれる。

7 まとめ

奥能登地域において、人口減少、過疎高齢化対策は、地域コミュニティ存続に最重要課題ともいえる。現在、県内外の各大学や公益社団法人大学コンソーシアム石川、能登キャンパス構想推進協議会等の地域思考型の取組みが推進され、大学の専門性やその特性を活かし大学—地域の協働型プログラムが実践されている。これにより地域—大学の双方にとっても協働の意識が醸成され、学生たちにとっての地域での実践的な取組みは、専門分野の学びの深化や主体的な学びの姿勢の促進へと繋がっており、地域における受け入れ体制の充実や地域人材の発掘・育成、地域力の活用促進・強化にもつながるものと期待される。特に異なる専門性や特性を有する他大学、他学部等の相互連携による複合的協働は、学生や大学スタッフのみならず地域側にとってもグローバル人材育成の推進に繋がるものと期待される。

しかし、これらの取り組みの多くは、事実上、未だ比較的単一大学や学内の限定的な取り組み状況（単一研究室やゼミナール等）による地域連携が多く、県内外の複数大学連携・協働による更なる地域課題解決型施策が望まれる。そのためにも、より一層の大学内、地域内、行政部局内での情報共有と協働体制が不可欠であり、本事業のような複数大学連携の継続的協働型プログラムやそれを支える地域担当者+大学教職員・学生+自治体行政担当者等による事業実行委員会などのサポート体制の確保と充実が望まれ、人材育成の視点からも、学生の体験型プログラムの協働推進に関する継続検討が必要である。

付記

本稿は、地域活性学会第9回研究大会（2017年9月、島根県立大学浜田キャンパス）での口頭発表研究（筆者代表）をもとに加修正したものである。

引用・参考文献

- (1) 穴水町, 2016, 穴水町町・ひと・しごと創生総合戦略, pp.55-58
- (2) 北國新聞社, 2016, 『日本遺産能登のキリコ祭り』
- (3) 池田幸應, 2016, 地域における大学間連携教育による人材育成—石川県における大学コンソーシアムを事例として—, 日本地域政策研究, 第17号, pp.4-11
- (4) 柳田国男, 1990, 『日本の祭り』, 角川学芸出版
- (5) 金沢星稜大学地域連携センター, 2017, 「奥能登『穴水町』の魅力～穴水アーカイブ～遺産継承『沖波大漁祭り』」